



明治用水 旧堰堤船通閘門



枝下用水 分水地点

目次

- ・企画展「明治用水と枝下用水―矢作川からの取水―」……………2
- ・寺部城と鈴木氏にまつわる伝説……………3
- ・鈴木正三没後350年記念事業にむけて
 鈴木正三ゆかりの寺 賢叔庵(長泉寺)……………4
- ・足助町の「鈴木正三史跡公園」が完成……………5
- ・新収集資料紹介
 「茶道録」「増補茶道録」～茶人・又日庵が遺した記録～……………6
- ・発掘調査速報……………7
- ・文化財シリーズ・資料館ニュース……………8

50号刊行記念付録 豊田市郷土資料館だより記事索引(No. 1～50)

企画展「明治用水と枝下用水―矢作川からの取水―」にて紹介します。

企画展案内

「明治用水と枝下用水 —矢作川からの取水—」

開催期間：平成17年1月29日(土)～3月6日(日)

会 場：郷土資料館第2展示室 入場無料

豊田市内を南北に貫流する矢作川は、長野県の大川入山に源を発し三河湾へ注ぐ、幹川流路117km・流域面積1,832km²を測る、西三河随一の大河です。矢作川は古くから舟運など、交通の幹線として利用されました。近代以降には水車紡績や農業用水、発電、上水、工業用水などに矢作川の水が利用され、西三河地域の生活基盤を支えています。現在では、矢作川の年間流水量(およそ18.7億t前後)のうち、実に50%の水量が西三河の中・下流域の農業用水・工業用水・上水道用水として利用されています。

このように高度に利水されている矢作川ですが、現代につながるような大規模な水利開発は、明治13年(1880)の明治用水、明治23年(1890)の枝下用水の開削によって始まりました。



明治用水旧頭首工(2代目の取水堰)
明治用水真景絵葉書より

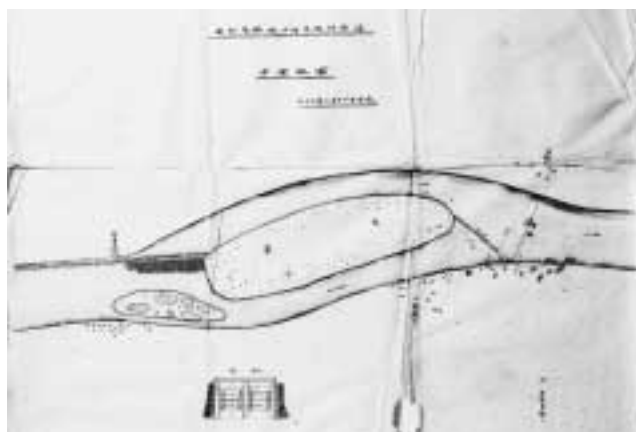
明治用水と枝下用水は、ともに豊田市内に水源を持ち、豊田市南西部から安城市を中心とした計約11,000haに及ぶ広大な地域を潤す、西三河地方を代表する大規模な用水です。この2つの用水は、灌漑地域の土地開発の基盤となった明治期の大事業であり、矢作川の水利開発における画期にもなっています。

今回の企画展では、矢作川の水の利用を考える上で大変興味深い存在である明治用水と枝下用水に着目し、矢作川の利水事業の歴史的な一面について、特に水の取り込みに関連する資料を紹介します。



明治用水取水口・平面図
明治用水土地改良区蔵

会場では、用水が開削された明治期の資料を中心に、それぞれの用水を管理している明治用水土地改良区と枝下用水土地改良区に保管されている貴重な資料50余点を展示します。それらの資料から垣間見える、初期の用水事業の一端をご覧いただきたいと思います。また、2つの用水に用いられた「人造石工法」と呼ばれる特徴的な技術についても紹介する予定です。



枝下用水旧堰堤平面略図
枝下用水土地改良区蔵

(展示構成)

- 矢作川からの取水の始まり
- 取水施設に関する資料
- 取水と諸問題
- その他関連資料

(天野博之)

寺部城と鈴木氏にまつわる伝説

(特別展「献馬大将—とよたのお祭り—と源氏の伝説—」より)

豊田市史人物編によれば、寺部城を築城したのは、鈴木大和守重勝(1345～1426)とも鈴木下野守重時(1426～1503)とも記されています。戦国時代に徳川家康に抵抗した寺部鈴木氏には、南北朝の英雄、足助次郎重範や河内守楠正成の系譜が伝えられています。

■ 楠正成と若宮八幡社

愛知県神社名鑑には、若宮町の若宮八幡社の社伝として、「楠正成が千早城落城後、しばらく許呂母の里に隠れ、南朝の功臣と策応して再挙をはかる。楠正成が武運祈願のために若宮八幡社を建立した。」と記載されています。

若宮八幡社の旧地名を「楠」といい、多門塚(月見町付近)は正成の屋敷跡といわれています。



若宮八幡宮(若宮町)

■ 足助次郎重範と鈴木重勝

重勝の父は鈴木喜三郎重員といい、室町時代初期の武将で矢並に在住していました。重員は、元徳元年(1329)、大和国(奈良県)高取に生まれ、父は南朝方の功臣足助次郎重範です。重員は、父重範の南朝(後醍醐天皇)の所縁により、大和国で、河内守楠正成の娘・真佐子を娶ったといい、子には、次郎重勝、三郎次郎重蔭、大四郎重茂がいます。

重員は、父の志を継ぎ南朝に属し、子重勝とともに北朝方と戦ってきたことから、重員・重勝父子の勇名は三河一円に聞こえたといえます。

重勝は、矢並を本拠とする鈴木氏の総領家当主と思われる武将で、後に寺部城を築きました。応永年間(1394～1427)には市場(小原村)に在り、後に則定城(足助町)に住み、応永33年(1426)足助で没しています。

■ 鈴木下野守重時

鈴木重時は重勝の孫にあたり、応永33年(1426)、則定城に生まれました。文明年中(1469～87)寺部に砦を築き、これが寺部城の始まりともいわれています。明応年中(1492～1501)、下野守入道として、寺部城に居たと伝えられています。明応2年(1493)、井田野(岡崎市)で松平親忠と戦った伊保・寺部・衣・八草の連合軍のうち、寺部城主は鈴木日向守重辰といわれていますが、重辰は重則の子・民部、あるいは重時の誤りではないかともいわれています。

■ 鈴木日向守と山本勘助

武田信玄には山本勘助という軍師がいました。勘助は三河牛久保(豊川市)の人で、諸国を放浪し城取り(築城)を極めた後、武田晴信(信玄)に仕えたといえます。一説に勘助が師として兵法を学んだのが寺部の鈴木日向守ともいわれています。勘助が日向守から学んだものがどのようなものであったのか記すものはありませんが、楠正成らの兵法が寺部鈴木氏に受け継がれ、山本勘助を介して武田信玄に伝わった可能性も考えられ、ふるさととよたの伝説として、たいへん興味深いものです。

■ 献馬大将 楠正行



寺部八幡宮のお祭りには、寺部から仁田四郎の人形、高橋から楠正行の人形が奉納されています。こうした人形が作られた背景も定かではありませんが、地域の伝説が少なからず影響していると考えられます。

(蟹 一夫)

鈴木正三没後350年記念事業にむけて

平成17年6月、江戸時代初期の仏教思想家・鈴木正三の没後350年を迎えます。記念事業実行委員会では6月24～26日に正三作の能「オモカゲ小町」の上演、合唱組曲「鈴木正三物語」の発表、長部日出雄氏(作家)の基調講演とシンポジウム、特別展「鈴木正三—その人と心—」、記念式典、交流会の開催など多彩な行事を計画しております。多数のみなさまのご参加をお待ちしております。

鈴木正三ゆかりの寺 堅^{けんしゅう}庵^{あん}(長泉寺)

堅^{けんしゅう}庵^{あん}は武蔵国多摩郡下長房村(現：八王子市・多摩御陵内)の山裾に土地の有力者井上出羽が正三に帰依、寄進して開いた寺です。庵の後山には正三の墓地があり、石塔と碑が建てられていました。近くに所在した井上家の菩提寺である長泉寺(臨済宗南禅寺派)の持分とされていました。明治時代初期には伽藍はすでに朽ち、安置されていた正三、恵中座像は長泉寺に移されていたようです。

その後、昭和2年から宮内庁による多摩御陵の造営によって、北東500m余の現在地に墓地も長泉寺と共に移転されました。現在地は長房団地につづく南向きの丘陵斜面にあり、長泉寺に坐像と墓塔が伝えられています。

堅^{けんしゅう}庵^{あん}は『新編武蔵風土記稿』の巻之百三、多摩郡之十五によれば

除地、二畝十五歩、小名

中郷二あり、萬松山と号

す、庵は六間半に三間南向、本尊釈迦木の坐像長二尺許、鈴木九大夫正三が起立する処なりと、正三が像及びその門人恵中の像を堂中に安す、長泉寺持、境内に正三が石碑あり

正三の墓塔

(以下略)

と記され、文政年間に編さんされた『武蔵名勝図会』多摩郡之部、巻八、由比領横山庄之下にもほぼ同意の記載があり、仏間に「石平堂」の額、次の間に恵中書の「堅^{けんしゅう}庵^{あん}」の額が存在していたこと、庵室の後山に墳墓があり石塔の高さ五尺五寸、「石平道人」、「明暦元乙未年六月廿五日歿 恵中書」の銘が刻まれていることや「正三道人外記」を引用して正三の生涯を紹介しています。さらに「この地は道人の終焉の地なるべし」と記されています。また、「石平道人の古跡堅^{けんしゅう}庵^{あん}」と題された庵の全景を描いた絵図(右図)が添えられています。

以上二書の記載から、庵の敷地は75坪(約248㎡)間口六間半(11.7m)奥行き三間(5.4m)の一棟、南面し、絵図にみるような素朴な小庵であったことがうかがわれます。山号は萬松山。位置としては現在の多摩御陵正面、右手の山腹あたりで、同じく正面手前の左手に長泉寺が建っていたといわれています。正三と恵中の坐像、恵中の位牌は長

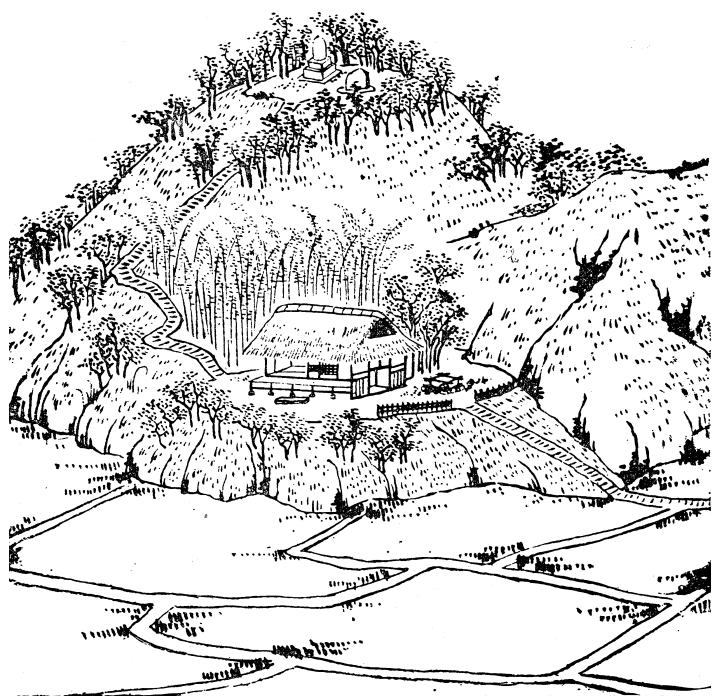
泉寺に伝えられています。正三に比して恵中の像は当寺の一体が知られているに過ぎず、道心堅固の人と容貌をつたえる貴重な像です。

庵の後山に築かれていた墓地は現在、長泉寺の東に隣接した同寺の墓地手前にあり、正三、恵中の石塔が左右に並び、前面に一對の灯籠が配され、その左脇に「石平道人碑」の碑が建っています。正三の偉業をたたえた碑で、「宝暦八年、……堅^{けんしゅう}庵^{あん}謹建焉」と刻まれています。右側の灯籠には「明暦元……奉造建灯籠……天徳精舎合山衆僧等……」、左側には「石灯籠一基 西禅庵造立」とあります。江戸での活躍の拠点であった、天徳院の弟子、修行僧や恵中(西禅)によって寄進されています。長泉寺の墓地は昭和31年、正三像は同39年に八王子市の文化財に指定されています。

記述のなかで「この地は道人の終焉の地なるべし」とありますが正三は駿河台の弟重之の邸で臨終をむかえていますので誤伝とおもわれます。正三の江戸での足跡の一つである堅^{けんしゅう}庵^{あん}についての記述は著書、伝記類にはみられず、不明な点が多く、これからの研究に期待がよせられています。

鈴木正三没後350年記念事業の特別展には長泉寺ご住職老師の格別なご理解により、正三、恵中の師弟像を出展いただける予定になりました。ここに記してお礼申し上げます。本稿執筆に当り八王子市教育委員会よりご教示いただいたことを付記します。

(松井 孝宗)



石平道人の古跡「堅^{けんしゅう}庵^{あん}」

足助町の「鈴木正三史跡公園」が完成

足助町が平成15年度から進めてきました鈴木正三史跡公園が完成しました。

史跡公園は、昭和30年に足助町・盛岡村・阿摺村・賀茂村が合併し、新足助町が誕生50年を迎えること、そして、平成17年には鈴木正三没後350年を迎えることから整備が進められていたものです。また、以前から正三の顕彰活動が続けてきた地域の方々の一こを訪れる多くの人に「正三」を少しでも理解してもらいたいとの強い思いも史跡公園整備への大きな力となっています。



場所は、正三の生誕地であり少年期までを過ごした足助町大字則定の地、かつての則定陣屋跡である則定小学校の校庭の裏手になります。心月院跡および心月院古墓と呼ばれる一帯が整備され、園路や休憩施設等が設けられています。

史跡公園内には鈴木正三・重成公像も設置されました。この像の制作にあたっては、史跡公園の整備に伴い、モニュメントをと、地域が中心となった建立期成会による募金活動が行われ、制作資金も集められています。

「きずな」と名付けられたこの像は、豊田市在住の彫塑家 安藤孝洋氏により制作されました。ブロンズ製のこの像は、正三・重成両公が並び立ち、史跡公園の中心部に設置されています。

さらに、則定小学校の前には、「鈴木正三記念館」

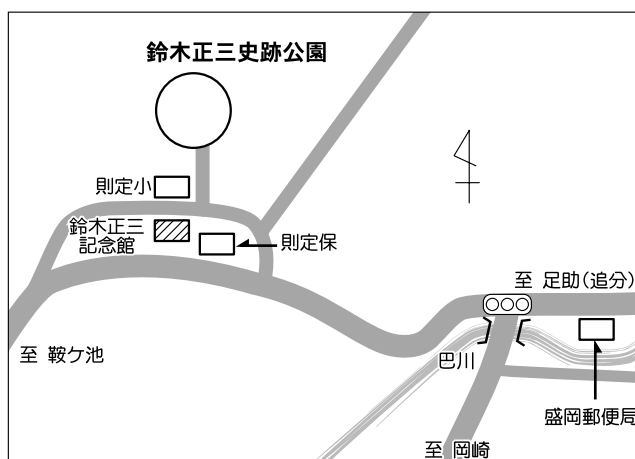


も開設されました。正三の足跡が分かりやすくパネル展示されています。

史跡公園と像の完成、記念館の開設を祝って12月12日(日)に記念式典が開催されました。式典当日は、足助町や豊田市をはじめ、熊本県本渡市等から関係者が出席し、史跡公園のテープカット、像の除幕式が行われました。記念式典の後には則定地区の皆さんによる手作りのおもてなしがあり、則定小学校児童による「鈴木正三物語—上方苦闘編」も上演されました。

豊田市も鈴木正三遺跡(豊田市山中町)とその近隣に駐車場の整備を進め、平成16年度中には完成します。

正三没後350年を前にゆかりの地が整備されることになり、多くの人がこの地を訪れることが期待されます。



「茶道録」・「増補茶道録」

～茶人・又日庵が遺した記録～

豊田市郷土資料館が新たに収蔵した資料から2点を紹介します。



「茶道録」(上)「増補茶道録」(下)

「茶道録」・「増補茶道録」は、いずれも豊田市ゆかりの茶人・又日庵^{ゆうじつあん}関係の資料です。

又日庵こと渡邊規綱は、江戸時代寺部周辺の領主であった渡邊家の10代当主です。実弟が裏千家11代家元^{げんげんさい}玄々斎宗室となったこともあり、茶道に造詣が深く手びねりの黒楽茶碗をはじめ、茶道具を多く遺しています。

「茶道録」

「茶道録」は裏千家流の茶道における道具の扱い・点前の決まりごと等を詳細に書き記したものです。その作者は不明ですが「増補茶道録」の附言の中で又日庵は、「茶道録」はその内容から不見斎^{ふけんさい}(裏千家9代)が筆記したものと思われるが、玄々斎は認得斎^{にんとくさい}(裏千家10代)のものだとしている旨を記しています。本書はその「茶道録」を又日庵が写本し、それに自らが見聞きした事柄を加筆したものです。加筆部分には「玄々曰……」と玄々斎から教えをうけた事を明確にし、あるいは年号を記し、道具のしつらえや取り扱いの所作について細かく記述しています。

「増補茶道録」

「増補茶道録」(以下「増補」)は先の「茶道録」をその名のとおり増補編集したもので、その1丁目に「不見斎口授 認得斎撰」「又日庵宗圃増補校正」とあり、又日庵自身による嘉永3年(1850)の附言と跋文がつけられています。内容は「茶道録」に朱書き加筆された事柄を追加、各項目の内容をさらに詳しく説明し、内容によっては図解をしています。また裏千家内の建物「寒雲亭」「柳の間」「今日庵」等の図面が加えられ「茶道録」80丁に対し、「増補」は242丁と約3倍以上の充実ぶりです。

又日庵が本書の出版を考えていたかは別としても千家流茶道の奥儀を正しく記録したい、留めておきたいという強い思いが感じられる書物です。

「茶道録」「増補茶道録」そして「喫茶送迎記」

又日庵の茶道に関する著書としては、これまで「喫茶送迎記」(以下「喫茶」)が知られています。天保2年(1831)の序文がありますが、出版はされず弘化4年(1847)に再び出版を試みたといわれる書物です。この3冊の関係をみると「喫茶」は「茶道録」「増補」に記載されている事柄が部分的に記述され、「増補」に「喫茶」を天保15年に加筆したと出てきます。また内容から「喫茶」は茶道具の扱いや点前についての記述(この部分「茶道録」「増補」と重複)は少なく、亭主と客の心得を重点において書かれています。こうした事から3冊は又日庵が天保初年頃、初心者入門書として「喫茶」(心得の部分か)をつくり、「茶道録」の写本(天保3年に在京しているのであるといはこの年か)を元に加筆編集を加え、天保15年に「喫茶」を加筆(道具の部分か)、その後嘉永3年までに「増補」を完成させたといえそうです。



「茶道録」(小文字は朱書きの加筆)

又日庵が遺したこれらの書は「本来、秘伝や口伝は記録されるべき性格のものではない」という考えに反するものです。しかし幕末動乱期の世情を良く知る又日庵は、茶道がより一般化・大衆化する近代化の流れを見据え、こうした書物を遺す必要性を感じていたのでしょうか。これまで茶道具中心に語られた又日庵ですが、これらの資料はこれまでとは違った千家流茶人としての又日庵を知る手がかりとなることでしょう。

(伊藤智子)



○ 堂外戸遺跡(市木町堂外戸)

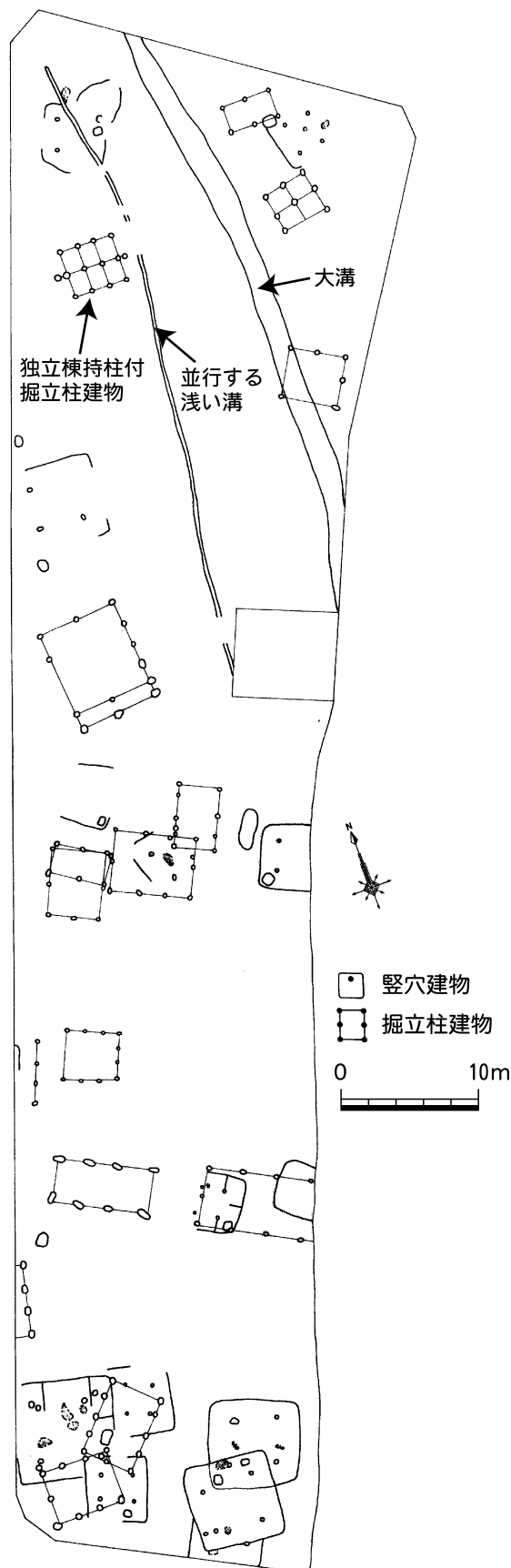
7月26日から12月1日にかけて、前半の約2,700m²の調査を完了しました。建物としては、竪穴建物14棟・掘立柱建物16棟があります。竪穴建物の大半は、5世紀から6世紀初頭の約100年ほどの間に営まれたものです。掘立柱建物は中世に属するものが大半ですが、独立棟持柱（伊勢神宮本殿のように建物外側で屋根を支える柱）を持つ総柱建物もあり、注目されます。

前号でお伝えした大溝（断面V字形／幅2.1m・深さ1.0m）の7～10m内側には、幅30cm・深さ20cmほどの浅い溝が並行して掘られており、堀か柵の基礎部分と考えられます。大溝から出土した土器の年代は、ほぼ5世紀から6世紀初頭に限られています。

このことから、本遺跡は堀などを伴う大溝で区画された古墳時代の遺跡であることがわかります。南側では竪穴建物が比較的多く分布するのに対し、数の少ない北側では大溝と軸を符合させるようにして、独立棟持柱を持つ総柱建物が存在しています。それぞれが機能を異にする空間であった可能性も考えられます。

古墳時代に建物群を溝で区画する例は、一般集落から独立した首長居館などが知られています。市内で調査されてきた一般的な古墳時代集落とは、やや異なる景観が復原できるようです。3月にかけて隣接する東側を調査するため、大溝の行方に関心が集まります。

また、中世(12・13世紀)の掘立柱建物や土坑も多く見つかっており、高橋荘に属する一集落の様子を垣間見ることができそうです。



発掘現場の航空写真

遺構平面図(scale:1/500)

ゆうじつてい
又日亭はもと寺部領主渡邊半蔵家の居城内にあった書院と茶席です。この席の設計者は渡邊家10代規綱公と考えられています。又日亭の名称は渡邊規綱公が雅号を又日庵と称していたことにちなんでいます。

明治25年(1872)頃、又日亭は寺部城より矢作川を筏で渡し、千足町の竜寿院に移築され、以来90年あまり竜寿院にありましたが、昭和52年に老朽のため解体されることになり、これを豊田市が譲り受け復元しました。現在、又日亭は七州城址公園内にあります。

又日亭は書院・茶席とからなり、書院は床・押入がつき、さらに全国的に見ても希少な例である鎧飾台が設置されています。茶人でもあり、武人でもあった規綱公の設計をしのばせます。



文化財シリーズ



鎧飾台

茶席は床の横に炉が切られた向切の席（入炉の一つで点前畳の客付に炉を切る形式）、床と琵琶台とが兼ねられた洞床（床の前面間口より内部の幅が広く、床の一方に洞の形を形作っている形式）となっており、これも茶人好みとなっています。

資料館NEWS

特別展「猷馬大将」終了

11月3日(水・祝)～12月12日(日)に、特別展を開催しました。様々な関連事業を行いましたのでその様子を紹介します。

■人形劇「おばあさんとたぬき」

11月3日11時からと13時30分からの二回、民俗資料館にて行いました。囲炉裏のある懐かしい雰囲気、宇野小四郎氏によるほのぼのとした1人形芝居をご覧くださいました。

■猷馬大将と記念撮影を撮ろう

第1展示室中央コーナーにて、猷馬大将「仁田四郎」と記念撮影ができるコーナーを設けました。

展示期間中は1,270名の来館者があり、大盛況に終わりました。

■まんざい競演「三河万歳 v s お笑い漫才」

12月4日2時より民俗資料館にて開演しました。

豊田お笑い劇団「笑劇派」のなんさや漫才、みこ舞講座受講者による「御幣の舞」「扇の舞」の披露、西山万歳保存会による「三河万歳・七福神の舞」の上演をしました。あいにくの小雨でしたが60名の方の参加があり、大きな笑いど熱気に包まれました。



利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

駐車場 約20台(無料)

■豊田市郷土資料館だより No.50■

平成17年1月14日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail : rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL : <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。